フランシスコ・フランコ・イ・バアモンデ
（Francisco Franco y Bahamonde）

1892年12月4日生まれ - 1975年11月20日没
スペインの軍人、政治家、独裁者（総統）。

一般には、**フランシスコ・フランコ** (Francisco Franco) と呼ばれる。フルネームは、**フランシスコ・パウリーノ・エルメネヒルド・テオードゥロ・フランコ・イ・バアモンデ・サルガード・パルド** (Francisco Paulino Hermenegildo Teódulo Franco y Bahamonde Salgado Pardo)。

敬称として「カウディージョ・デ・エスパーニャ（Caudillo de España）」と呼ばれる。

【その生涯】

- 1892年： 12月4日、スペイン北西部の港町エル・フェロルの保守的中流家庭に生まれる。
- 1907年： 父方の家系が代々海軍と深い関係にあり、当初、海軍の職業軍人の道を目指したが、政府が軍事費削減のために海軍士官学校の募集停止措置をとったため、この年、やむなくトレードの陸軍歩兵士官学校に入学した（14歳）。
  - フランコに政治家への不信を抱かせる大きな契機となった。
  - 士官学校の厳しい生活で彼は規律と服従の精神を徹底的に教え込まれ、その生真面目さは同期生のからかいの種にもなった。
  - 親しみからではなく単に小柄な体格から「フランコちゃん（**フランキート**）」のあだ名を与えられ、ガリ勉の評判もとった。
- 1910年： 同士官学校を卒業。その時の席次は、312中の251番で、少尉のランクでの任官となった。
  - スペイン本国での昇任は年功序列であり、このままでは職業軍人として成功する可能性は低かった。

※　かつて広大な帝国を築いたスペインも、一九世紀末にはキューバやフィリピンの植民地を残すに過ぎず、これらも一八九八年の米西戦争で喪失した。帝国の威信を失ったスペインに膨張主義的野望を満足させたのは唯一北アフリカの**スペイン領モロッコ**であった。数世紀にわたって軍事拠点としていたセウタとメリリャを核に、フランスと競って一九世紀後半から北部の支配領域を広げていった。このモロッコ権益の確保は国民に多くの負担と犠牲を強いるものであり、一九〇九年には、急進化した反戦運動への政府の過酷な弾圧（「悲劇の一週間」）が生じた。

●「アフリカ派」の指導者に

- 1911年： スペイン領モロッコで民族運動が燃え上がる。
  - フランコは、活躍と昇進の道を求めて、アフリカ駐留軍に志願。
- 1912年： 2月にメリリャに着任。以後、1926年までに都合11年を、スペイン領モロッコで過ごすことになった。
  - この間、モロッコ独立運動の鎮圧に目覚ましい軍功を挙げる。
- 1916年： 重傷を負う
- 1917年： 少佐に昇進
- 1926年： 准将となる（弱冠33才でヨーロッパでもっとも若い将軍となった）。

※彼の勇気と剛胆を称える伝説ができたのもこの頃である。狙撃された弾が手にもっていたコーヒーカップに当たると、敵兵に向かって「今度はもっとよく見て撃て！」と叫んだという。

いずれにせよ、1916～26年に915人の士官と16000人の兵士が命を落とした前線に暮らしながら一度の負傷で済んだのは強運といえるだろう。彼は「バラカ」（幸運と神の加護）をもつと噂され、モロッコ軍将校たち「**アフリカ派」の指導者**になっていた。

- 1928年： サラゴサ総合士官学校長に任命される。
  - ここで、のちに腹心の部下となる士官を育てる。
  - 校訓十ヶ条――社会秩序の維持、義務、規律、献身を基調とする。「祖国と国王を愛すること」を第一に求める。

- 1930年： プリモ・デ・リベーラ独裁の崩壊

●第二共和制の成立とスペイン内戦。フランコによる全権掌握への道。

- 1931年：　国王は亡命し、**第二共和制**が誕生する。

※政治的発言や行動を努めて避けるフランコも、軍隊改革の名のもと士官学校を削減するという陸軍大臣アサニャの措置には我慢ならなかった。彼の誇りとするサラゴサ総合士官学校も含まれていたからである。

1931年7月、閉校に当たっての演説で、「上の連中の行動がいい加減で間違っていて我々が反抗の心で煮えたぎっている」ときでも「規律」を維持することが必要だと訴えた。

当然、彼は「上の連中」である陸軍大臣の譴責を受けて地方に左遷された。

- 1934年： 総選挙の結果、**右派共和政権**が成立。

  ⇒「規律」を重んじるフランコを再び重用した。

- 1934年： 10月、右傾化に危機感を抱いた労働者蜂起がアストゥリアスで起こる。
  - フランコはその鎮圧を委ねられた。
  - モロッコ人部隊と外人部隊を送り込んだ手荒な作戦は、左派共和主義者と労働者の間にフランコへの憎悪を植え付けた。
  - 一方、「共産主義を扶植する試み」を制圧したフランコは、モロッコ軍総司令官、次いで**参謀総長**となった。

Columna de prisioneros asturianos vigilada por la Guardia Civil

- 1936年： 2月、人民戦線が成立。
  - フランコは、カナリア諸島に左遷された。
  - 右派勢力の間にクーデタ計画が煮詰まっていくが、軍事行動の勝利に確信を持てないフランコは逡巡を重ねたようである。その態度に「カナリア嬢」と彼を揶揄する者もいた。
- 1936年： 7月、**クーデタ**は、モラ将軍やサンフルホ将軍の主導で引き起こされた。
  - 右翼の大立者**カルボの暗殺**（7月12日）が内戦勃発の直接の引き金になったが、同じく左派の憎しみを買うフランコも、もはや後戻りはできなかった。

    「祖国はまたひとり殉教者をうんでしまった。」
    「もはや座して待つことはできない。これは合図なのだ。」
  - 反乱はクーデタとしては失敗し、スペインは二年八カ月にわたる**内戦**へと突入した。

※反乱軍のなかで重要な役割を果たしたのはフランコが掌握するモロッコ軍であった。全体主義国家ドイツとイタリアの支持をとりつけ、モロッコ軍の本国移送を果たしたことは、フランコの立場を決定的にした。彼は、他の有力軍人の死亡という偶然も重なって、反乱軍側の全権を掌握した。

⇒**三軍総司令官**、元首と首相を兼ねた**国家首長**、単一政党**「統一ファランヘ」党首**となった。

※フランコは、国家とカトリシズムの一体性を唱え（**ナショナル・カトリシズム**）、「神と歴史の前にのみ」責任を負う、という独裁体制を堅持する。

※スペイン内戦は、「スペイン戦争」とも称されるようにその趨勢を決定づけたのは国際条件であった。

イギリスやフランスの民主主義諸国が戦争の拡大をおそれて不干渉政策をとったのに対して、ドイツとイタリアは積極的にフランコ将軍を支援した。

とくにドイツは、きたるべき第二次大戦に向けての訓練と新兵器の実験場としてこの内戦を利用した一九三七年四月には「コンドル」兵団によってバスク地方の聖都**ゲルニカの爆撃**を行なった。

この空爆は史上初の都市無差別爆撃であり、国際世論の大きな反発を招いた。ピカソはパリでこの惨状の報を知り、その夏のパリ万博スペイン館のために超大作『ゲルニカ』を制作した。

国際的反響をおそれたフランコ側は、ゲルニカの惨状が共和国派の民兵が退却時に火を放ったせいだとして**事実をあくまで否認した。**

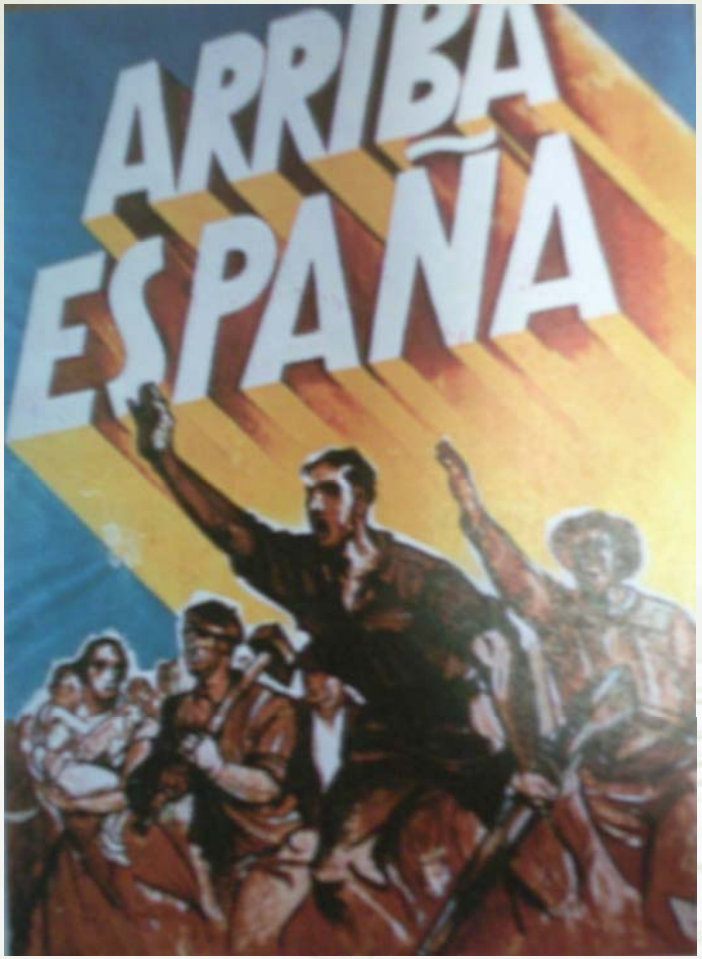
●フランコ独裁体制

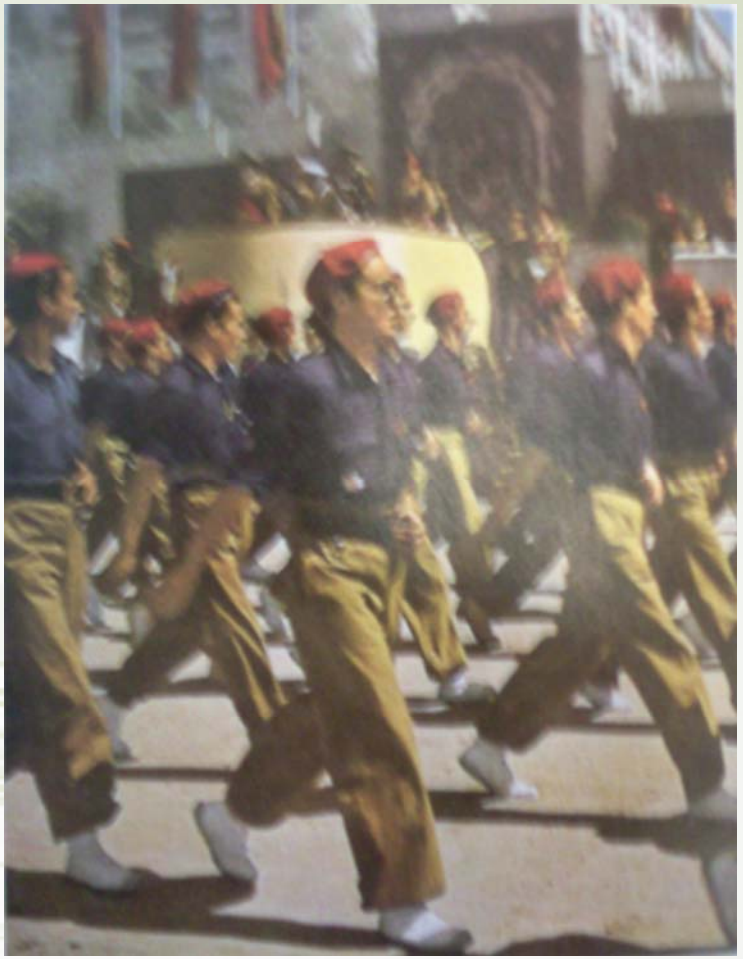
※内戦は二年八ヶ月にわたって続き、フランコ側の勝利に終わった。戦争の犠牲者の正確な数字は定かではないが、この戦争はイデオロギー的対立の顕在化した内戦であり、両陣営、とくにフランコ側によるテロルと処刑の犠牲者が多かった。また、長期の戦いの中で、栄養不良が疾病による死亡率も高かったし、敗北した共和国派の多くの人々が亡命を余儀なくされた。

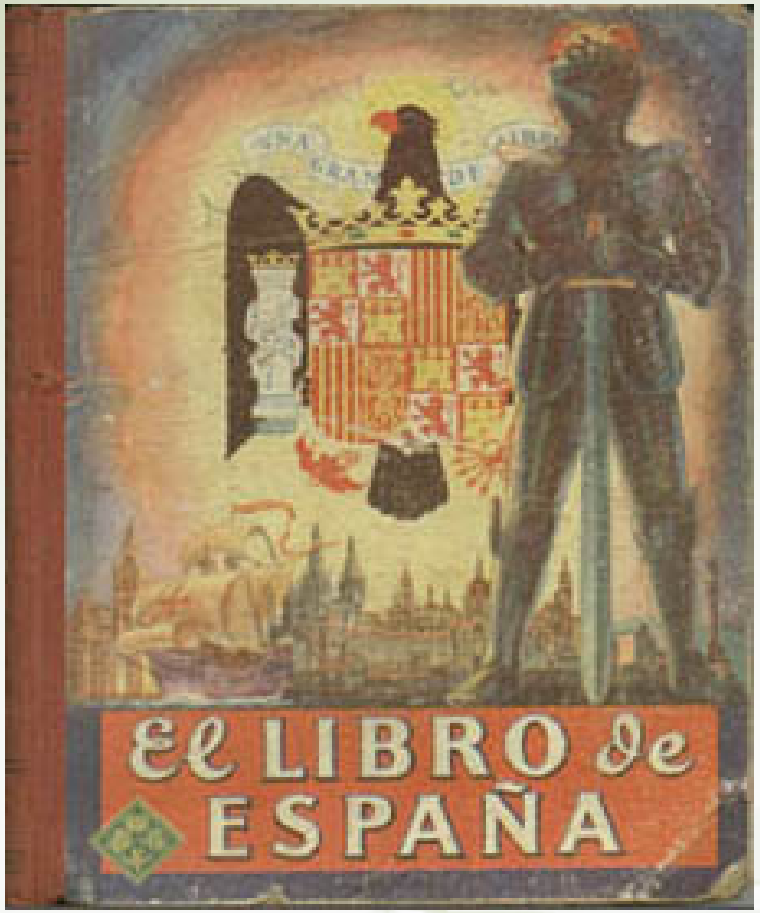
総じて内戦は、「百万の死者」を生んだといわれる。

※当然、内戦に勝利したフランコの独裁体制は、ファシズム的性格の濃厚なものであった。第二次大戦にスペインが参戦しなかったのは、国内の疲弊がそれを許さなかったからであり、フランコの**枢軸国寄り**は明らかだった。

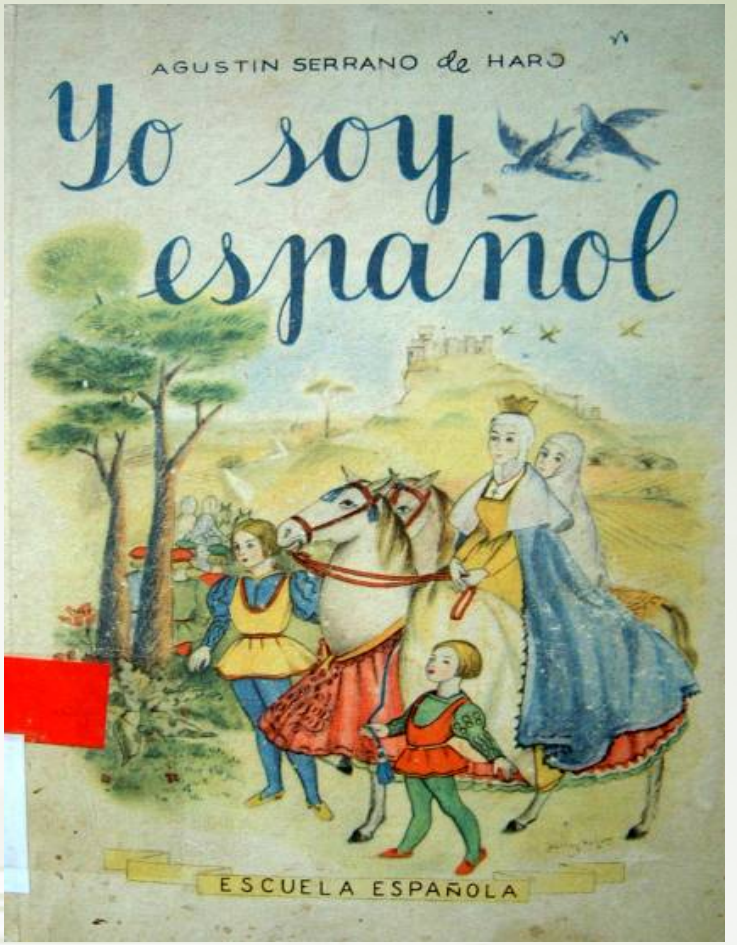
Bar MUNDIAL


ARRIBA
ESPAÑA




El LIBRO de ESPAÑA

(1928)


AGUSTIN SERRANO de HARO
Yo soy español
ESCUELA ESPAÑOLA

(1943)

ナショナル・カトリシズムの国

- 1945年： 7月、ポツダム会談。最終日に反フランコ宣言発表。
- 1946年： 2月、国連総会でフランコ政権非難決議。

⇒大戦後の国際社会でスペインは、国連への加入も拒まれて**孤立**した。

※しかし、国際的孤立を「**ユダヤ人＝フリーメーソン＝共産主義**」**の陰謀**であると国民に説き自給自足経済政策を進めるフランコ体制の政治・経済危機を救ったのは、他ならぬ米ソの冷戦構造であった。

伝統的カトリック的価値の擁護をもって「西側の歩哨」を自認するフランコのスペインは、西側諸国にとっては「**反共の砦**」として重要
となった。

- 1953年： 相互防衛・経済援助・基地貸与の米西協定が結ばれる。
- 1955年： 国連加盟が実現

⇒やがて**西側の投資**が活発化した。

（だが、スペインが西側のもうひとつの価値、民主主義を実現するまでにはさらに20年を要することになる。）

- 1956年： 2月、マドリード大学で学生運動
  4月、スペイン領モロッコの独立
- 1957年： **オプス・デイのテクノクラートが参加した新内閣成立**
  - 自給自足体制（アウタルキーア）の最終的放棄。
  - ファランへの後退を決定づける。

•1959年： 12月、アイゼンハワー大統領のスペイン訪問

ヨーロッパ諸国へ
の出稼ぎと移民

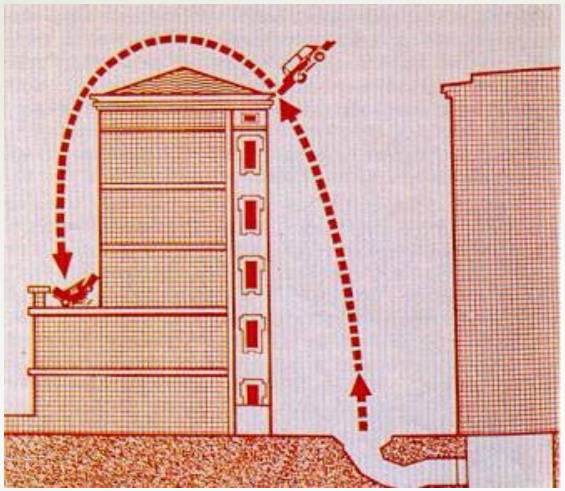
ツーリズムの始まり

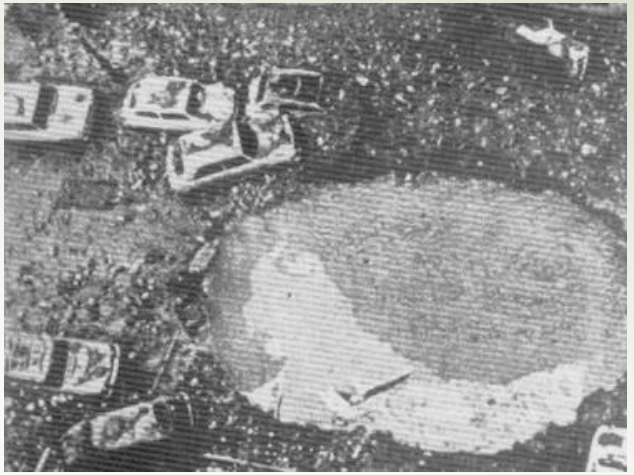
伝統的農業の衰退

- 1969年： フランコ、後継者としてブルボン家フアン・カルロスを指名

- 1970年： 12月、ETA活動家に対する
  ブルゴス裁判

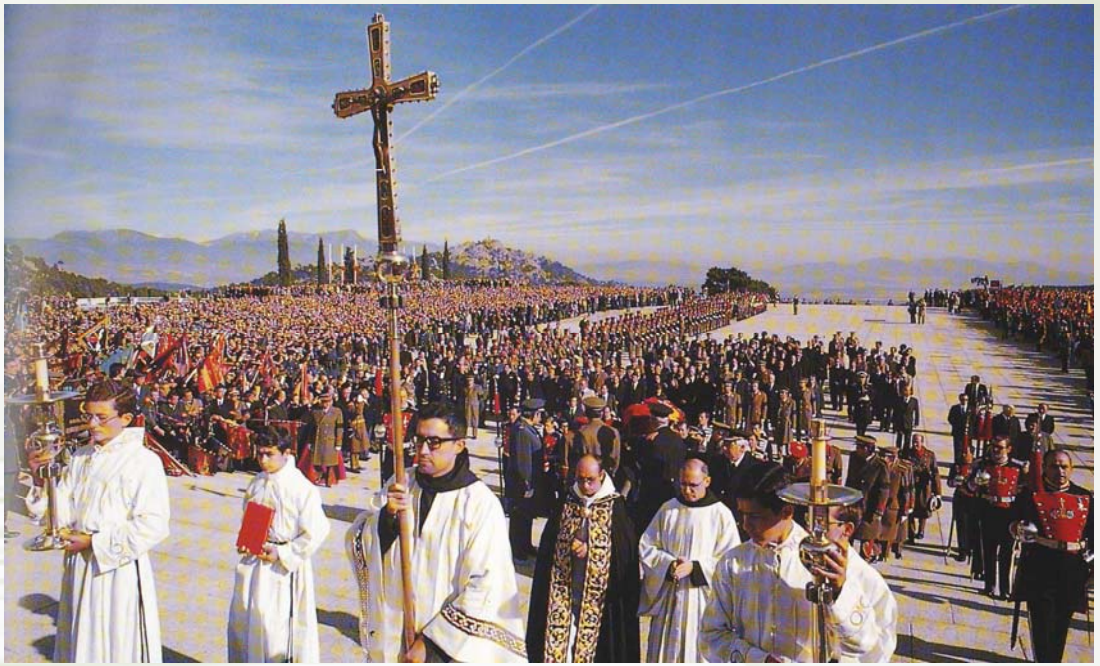
- 1973年： 12月、**カレーロ・ブランコ**がETAによってマドリードで爆殺される。





- 1974年： 7月、フランコの病状の悪化
- 1975年： 11月20日、フランコ死去
  - 国民への遺言

    「自分に対するのと同様の忠誠をもってフアン・カルロスを支えよ、祖国の敵に警戒せよ。」



LA VANGUARDIA
ESPAÑOLA

Ahora que ya no está con nosotros

LA VANGUARDIA
EDICION EXTRA
ESPAÑOLA

12.37 HORAS 22 noviembre de 1975

JUAN CARLOS I
REY DE ESPAÑA

HOY COMIENZA UNA NUEVA ETAPA EN NUESTRA HISTORIA

ESTE HA SIDO EL JURAMENTO:

·1975年： 11月22日、フアン・カルロス1世が国家元首として即位

歴史と記憶

スペイン政府は2006年3月17日未明、首都マドリードで最後の一体となっていたフランコ将軍の銅像を撤去した。同国議会は昨年11月、「人権抑圧に関与した人物をたたえるのはおかしい」として、フランコ将軍のシンボルを公共の場から排除する決議を可決していた。クレーンを使って撤去されたのは、中心部サン・フアン・デ・ラ・クルス広場に立つ高さ7メートルの騎馬像。

Testamento de Francisco Franco, Jefe del Estado, leído por el Jefe de Gobierno D. Carlos Arias Navarro el día 20 de noviembre de 1975 a través de la televisión.

Españoles:

Al llegar para mí la hora de rendir la vida ante el Altísimo y comparecer ante Su inapelable Juicio, pido a Dios que me acoja benigno a Su presencia, pues quise vivir y morir como católico. En el nombre de Cristo me honro y ha sido mi voluntad constante ser hijo fiel de la Iglesia, en cuyo seno voy a morir. Pido perdón a todos, como de todo corazón perdono a cuantos se declararon mis enemigos, sin que yo los tuviera como tales. Creo y deseo no haber tenido otros que aquéllos que lo fueron de España, a la que amo hasta el último momento y a la que prometí servir hasta el último aliento de mi vida, que ya sé próximo. Quiero agradecer a cuantos han colaborado con entusiasmo, entrega y abnegación en la gran empresa de hacer una España unida, grande y libre.

Por el amor que siento por nuestra Patria, os pido que perseveréis en la unidad y en la paz y que rodeéis al futuro Rey de España, Don Juan Carlos de Borbón, del mismo afecto y lealtad que a mí me habéis brindado y le prestéis, en todo momento, el mismo apoyo de colaboración que de vosotros he tenido.

No olvidéis que los enemigos de España y de la civilización cristiana están alerta. Velad también vosotros, y para ello deponed, frente a los supremos intereses de la Patria y del pueblo español, toda mira personal.

No cejéis en alcanzar la justicia social y la cultura para todos los hombres de España y haced de ello vuestro primordial objetivo.

Mantened la unidad de las tierras de España, exaltando la rica multiplicidad de sus regiones como fuente de la fortaleza de la unidad de la Patria.

Quisiera, en mi último momento, unir los nombres de Dios y de España y abrazaros a todos para gritar juntos por última vez, en los umbrales de mi muerte:

¡Arriba España! ¡Viva España!

Francisco Franco. Madrid, 20 de noviembre de 1975